

誰かのために、何かをしたい という気持ちを大切に

宮城県古川黎明高校

進路指導部長

玉田賢司

ただけんじ●1969年生まれ。東北大学文学部卒業。同大学院文学研究科博士課程前期修了。仙台市立仙台高校、松島高校、築館高校を経て、2007年古川黎明高校赴任。09年より進路指導部長。教科は歴史・公民（社会）、陸上競技部顧問。

2011年3月27日、東京大学において「平成23年度第2次学力試験（後期日程）」の追試験が行われた。受験者は12人。東日本大震災により、13日の後期試験本番をやむなく欠席した東北地方を中心とする生徒たちだ。

そのなかに、宮城県初の県立の併設型中高一貫校、古川黎明高校（以下、黎明）1期生のヒロスケもいた。生物オリンピックへの挑戦など、一度目標をたてるとのめりこむタイプ。社交的なほうではないと本人はいうが、芯のしっかりした好青年だ。彼は、震災から追試までの2週間を次のように振り返る。

「幸い家族や家は無事でしたが、ボランティアに参加する友人もいるなか、何かしなくてはという焦りがありました。でも、自分が今やるべきは勉強に集中す



ること。そして将来、復興の役に立つこと。それが支えてくれている多くの人たちへの恩返しになると思っていました」

日「ろから、「愛」や「人のために」を口癖にしている同校進路指導部長の玉田賢司(42)は、彼の口からでてきたそうした言葉を誇りに感じた。

3月11日以降、多くの人がそうだったように、玉田もまた、被災地の教員としてすべきことは何か、懸命に考えた。沿岸部のような壊滅的な打撃は免れたとはいえ、大変な被害と不安のなかで、生徒の行動から学んだことも多かった。「人の教員の震災前後を描く。

文／堀水潤 撮影／渡邊力

ま

ずは、玉田の人となりおよび経歴から紹介したい。自他共に「熱い」「暑苦しい」と評される熱血教員ではあるが、玉田に押しつけがましさはまったくない。いつも生徒と同じ目線にたち、体当たりでぶつかるかと思えば、親身に相談にのる。スマートな外見や、親しみやすい人柄もあり、生徒から信頼され、慕われているのがわかる。

子どものころから人望はあつかった。人との接し方は家業の電器店を手伝いながら身につけたという。中学時代は、生徒会長として人一倍目立った。だが、校内暴力の全盛期。不良連中から目をつけられた。やることなすこと邪魔をされ、我慢も限界に達したある日、玉田は、信頼のおける教員に「俺、もう嫌ですよ。あんなやつら死んでしまえばいいんだ」と感情をぶちまけた。いつも玉田のことを大人扱いしてくれていたその若い教員は、じつと耳を傾けたあと、口を開いた。

「お前の気持ちはわかった。でもな、玉田。世の中には回り道をしなければ成長できない人間もたくさんいるんだ。お前は、まっすぐ道を歩んできた男だ。だから、そのまままっすぐ進め。そして、その先で、回り道をしているやつらを待つてやれる人間になれ」

この言葉が、今の玉田の原点となった。

「とてつもない衝撃で、教職という仕事のもつ凄みを教えられた気がしました。教員というのはそんな視点にたつて、そのような長いスパンで生徒のことを見ていたのかつて。目の前のことしか考えていなかった自分ですが、初めて人生の奥行きを見せつけられた気がしました」

教職について5年目。松島高校に赴任したときほど、その言葉が支えになった時期はない。当時の同校は、類型制の導入、制服の変更、服装指導の強化など、あらゆる面から変革を始めていた。抜本的な改革が待ったなしであるほど荒れていたのだ。

「授業はなりたらず、生徒からはなめられ、最初の1週間は悔しくて、トイレで泣くこともありました。でも、そうした生徒も回り道をせざるを得ない状況にある

だけです。何とか元の道に戻るよう、あるいは、今は難しくても、いつかわかつてもらえるよう、生徒から決して逃げず、真剣に向き合っていました」

2年目には29歳の若さで進路指導部長を託された。同僚にも恵まれ、玉田らは職場体験学習を軸とした体系的なキャリア教育を構築していく。職場体験自体は、「座らせてだめなら体験させてみよう」という管理職と前任者のもとですでに始まっていた。玉田らは、進学希望クラスを含め生徒全員が希望する職場にいけるようにしたり、日数を3日に増やしたりするなど、手を加えていった。

鍵は、自己有用感の乏しさをいかに払拭するか。最初こそ、職場から逃げ出す生徒もいたが、ほめられたり、励まされたり、感謝されたりするなか、自分に自信をもつ生徒が増えていった。一時は、県内一を数えていた中途退学者数は激減し、学校は見違えるほど明るくなった。

古川黎明のキャリア教育

松島高校で7年を過ごしたあと、3年間の築館高校



勤務を経て、07年、玉田は古川黎明高校に赴任した。地元の大きな期待のもと、歴史ある女子高を母体として05年に開校した県内初の併設型中高一貫校だ。

「みんな志が高く、翼がみえるようでした。それを羽ばたかせ、難関大学だろうが、就職だろうが、希望を叶えることが使命です。結果は求められていますが、受験」

辺倒ではなく、行事や部活も一生懸命やりながら、生き方を考えさせる学校にしたいと強く思っていました」

県内各地から集められた教員による熱のこもった授業は生徒から好評で、学年があがるにつれ学校の雰囲気は盛りあがっていた。翌々年、進路指導部長になった玉田は、進路指導室を明るく改装し、生徒をどんどん相談にこさせた。進学校にも、回り道をしている生徒は大勢いる。何の問題もなさそうな子が、深刻な悩みを抱えていることも多い。そこに気づき、一緒に回り道をするからこそ教員の使命だと感じていた。

生徒の前で「愛」という言葉をよく口にするようになったのもこのころだ。中学校以来の価値観や生き方を、ストレートに表した言葉である。

「『愛って、要するに誰かのために何かをしたいと思う気持ち。そういう気持ちがあれば、世の中の悲しい問題の多くはきつと解決するって思わない？ 進路選択も、将来、人のために何ができるかという視点で考えてほしい』。そんな話をよくしています。『恥ずかしいことを真顔でよく言うよ』って反応の生徒も多いけれど、伝えたいことはそこにつきますから。進路指導部長としてはどうかと思いますが、生徒や保護者の前で話すときも、入試状況や合否データがどうこうという話はあまりしません。どちらかというと生き方についての話が多いんです」

玉田は手探りで総合学習のプランを構築していった。キャリア教育は特別なことではないという持論のもと、クラス経営、教科指導、生徒指導、部活動など、日常のあらゆる活動のなかで生き方を問うような取り組みをしてほしいと教職員にうたえると同時に、体験学習の柱として、「仕事最前線レポート」(1年)、「大学最前線レポート」(2年)、「黎明社会人(大学生セミナー)」(3年)などを立案していった。それぞれ、職場訪問、大学訪問、社会人(大学生)講話に類するものだ。

その一つ、毎回30人を超す社会人講師を招き、車座になって生徒に人生を語ってもらう「黎明社会人セミナー」は、NPOの協力を得て実施している。

「もともと3年次は、ゼミのような課題研究を考えていたのですが、『進路指導に充てたい』教員の負担が増すなどの意見から実施は困難でした。そんなとき、学校と地域、大人と若者を結ぶ活動をしているハーベストというNPO法人に出会いました。地域には、教育に手を差し伸べたいという大人が大勢います。しかも教育現場だけでは掘り起こせない貴重な経験や情熱をお持ちです。そうした方々に話していただくことで、人生の選択肢は無数にあることを生徒に伝えたいと思いました」

一般的には低学年で実施しそうな企画だが、3年次に行なったことが効果的だった。おおよその進路を決めている生徒に揺さぶりをかけることで、本当にその進路でいいのかを考えさせたり、覚悟を決めさせたりすることになる。逆に、進路がまだ定まっていない生徒には、一歩

進路選択とは 人生の選択だ



踏みだす勇気を与えることができたという。

「進路指導というのは普通、学年があがるにつれて選択肢を狭めていく指導ともいえます。でも、あえて途中で選択の幅を広げるというのもありだと思のです。進路を真剣に考える3年生だからこそ響くものもあるはずです。それによって迷いが生じた方がいい。私は、『進路選択は人生の選択だ』といつも生徒に迫っています。人生を真剣に考えれば考えるほど、迷うし、わからなくなってくるのは当たり前。健全なことだと思っています」

それぞれの3月11日

2011年春、6年間かけて歴史をつくってきた黎明1期生の受験シーズンが始まった。揺さぶりをかけられ、それでも覚悟を決めた生徒は次々と夢をかなえていった。土曜塾や学習合宿、手厚い課外指導など、学校



と生徒が一丸となったこともあり難関大学の合格者も大勢誕生した。

もちろん、順調にいった生徒ばかりではない。1期生の期待を一身に背負っていたヒロスケは、東大の前期試験でまさかの不合格。「合格することで、勉強の面白さを気づかせてくれた黎明に恩返しをしたい」という密かな思いもあっただけに、学校に結果を伝えるのは気が重かった。だが、後期試験に切り替えるしかない。発表翌日の11日に登校し、各教員からアドバイスを受けた。

ヒロスケが学校をあとにしたところ、玉田は午後の授業で、2日前におきた最大震度5弱の地震を引き合いに、小学生のときに体験した宮城県沖地震の話をしていった。家業の電器店がめちゃくちゃになったことや、懐中電灯や電池を買いに客が殺到したエピソードを披露し、そう遠くないうちに来る大地震に備えるよう話していた。

震度6強の揺れに襲われたのは、その授業が終わり、進路指導室に戻った瞬間だ。あわてて廊下に飛び出し、生徒に覆い被さりながら、周囲に「窓から離れろ」と叫

ぶことで精いっぱいだった。長い揺れがおさまると、コンクリートが落ち、什器が転倒する校内を走りまわり、生徒の安否を確認していった。外は季節外れの吹雪。いったんグラウンドに誘導された全校生徒は、比較的被害が少なかった建物に移動した。沿岸部が大変な状態になつているという報道が断片的に入るなか、迎えにくる保護者の車の交通整理を夜遅くまで続けた。

仙台市近郊の自宅に帰宅したのは23時ころ。避難所が人であふれていたため車内に避難していた家族と合流し、暗闇のなか親子4人が横になれるだけのスペースを確保して、寒さをしのぎながら余震が続く一夜を過ごした。食料や燃料の確保など心配事は山積したが、心中穏やかでなかったのは、親戚や生徒の安否についてだ。少なくとも11日に在籍していた生徒の無事は確認できていたが、欠席者や卒業生の消息はわからない。松島高校時代の教え子のことも気になって仕方なかった。特に東松島市などの沿岸部に住んでいる子の消息だ。玉田は、あらゆるつてを使い、消息を確認し続けた。

受験のため、東京や北海道にいるはずの生徒のことも心配だった。状況がつかめないだけに、東京でさえ無事なのかどうかかわからない。考えること、やるべきことが押し寄せ、それらを同時に処理する状況が続いた。国立大学の後期試験に関する情報も早急に集める必要があった。延期なのか、中止なのか、追試は行われるのか。一刻も早く正確な情報を生徒たちに伝えたかった。

そのうちの二つ、東大の追試が行われるという情報が入ってきたが、ヒロスケに電話を

してもつながらない。玉田らはガソリン不足を気にしながら彼の自宅まで車を走らせた。追試が実施されるという情報はすでにヒロスケの耳に入っていた。東京在住の姉が大学に何度も問合せで得た情報が、役場経由で直接自宅まで届けられていたのだ。ヒロスケは言う。

「家族や先生方など、本当に自分は、いろいろな人に支えられているのだと実感しました。黎明生なら、きっとボランティアに参加しているはずですよ。自分も何かしなくてはという思いがずっとありました。でも、合格することが、そうやって支えてくれていた人たちに対する一番の恩返しだと思い、勉強に集中していました」

そして25日夜、新幹線もまだ復旧しないなか、緊急支援用の満席の夜行バスでヒロスケは東京へ向かった。

ボランティアに多くの生徒が参加

ヒロスケが想像していたとおり、そのころ同校では、大勢の後輩たちがボランティアに参加していた。

例えば、生徒会長のアユミは、友人が集めた食料や衣類などの救援物資を運ぶため、県南の白石市から沿岸部の山元町まで片道30キロの山道を、山岳部の男子にまじり、買い物用の自転車で行っていた。体力に自信はなかったが、同じ県民として何かしたいという思いに、突き動かされたのだという。その経験が後日生きた。生徒会として何を行うべきか考えていた当初、彼女の頭に浮かんでいたのは募金活動であった。だが、被災地に近い自分たちがやるべきことは、もっと直接的なことだと考えをあらためた。そして学校再開後にしたのは、市内17校合同で、生徒会を中心にジャージや靴などを



「迷い、回り道しながら成長を」

集め、石巻の高校に送ることだった。また、避難所ではこの先、物資の支援より、心のケアが必要になるだろうと感じていた。今後は、七夕など折に触れ、被災者の気持ちを和ませる活動をしたという。

陸上部キャプテンのタクミは、2週間、避難所で支援物資の仕分けや、壊れた家の修復作業を手伝った。

「震災後、普段あまり会話を交わさない近所のおばさんに、とてもやさしくされました。そうやって、人に助けてもらっているのだから、今度は自分が助ける番だと思って活動していました。みんなどこかでつながっているのだと心から思いました」

ユウタは、10日間にわたり物資の仕分けや、避難所の子どもの遊び相手などをした。動機は「暇だったから」と素っ気ないが、「新聞などをみるにつれ、家でだったらしていられなかった」とも話す。ボランティアセンターに通うことはしだいに普通のことになっていた。

「救援物資は日に日に増えていくのに、それでも足りず、災害の大きさを感じました。避難所での生活を余儀なくされている人たちをみるにつれ、これまでの日常がどれほどありがたいことか痛感しました」

こうした活動の多くは自主的なもの。地元自治体の要請に基づき、震災後しばらくしてから、ボランティア募集の告知メールを生徒に一斉送信していたが、その後誰が参加したかなどは学校として正確に把握していない。玉田の実感としては、市内在住の生徒を中心に、半数近くが何らかの形でかかわったのではないかと。

「普段、生徒に『人のために生きてほしい』などと偉そうに言っている自分は何もしていないのに、彼らは自分すら大変な時にボランティアに率先して出かけていました。そんなふうにすぐに思い立って行動できる今の若者はすごいと思つたし、本当に頼もしく感じました」

驚かされたのはボランティアだけではない。危機に際したときの機転や行動力だ。遠方の受験先で被災した生徒は、慣れない土地でどう対処し、帰ってきたのか。

ミズキは、その瞬間上野駅にいた。土地勘もないまま2日間にわたり帰宅難民用の緊急施設を転々とするなかで、境遇を共にする人々と声を掛けあい、食料をわけあった。そんななか偶然出会った黎明とゆかりのある夫婦の車に乗せてもらい、数百キロ先の自宅まで送り届けてもらったのだという。人の温かさとともに、積極的にコミュニケーションをとることの大切さを痛感した。こうした行動は、進路選択にも影響を与えたようだ。

自転車で救援物資を運んだ生徒会長のアユミは言う。

「将来、国際貢献ができる仕事につきたいとずっと思っていました。今回、助けを求めている人は身近な場所にもいることに気づかされました。視野を広げるといのは世界に目を向けることだと単純に考えていたが、必ずしもそればかりではありません。今は、人に笑顔をわけられるような仕事につきたいと思っています」

陸上部キャプテンのタクミは、石巻市の惨状をみて恐怖で足が震えたという。救援活動にたずさわる大勢の人々をみるにつれ、海上保安官になりたいという夢をいつそう強くしたという。

上野で震災にあつたミズキはこう話す。

「東京の避難所に行ったとき、『この中に、医師か看護師の方はいませんか?』というアナウンスがありました。そのとき手を挙げられたら、どんなによかったか」

看護師を目指す思ひは、ますます膨らんでいる。

ヒロスケは無事、東大に合格した。合格発表が3月28日で、入寮のため上京をうながされたのが4月1日という慌ただしさだった。今は大学での学びが楽しくて仕方がない。研究者を目指すしているが、アカデミックなそれではなく、直接人の役に立つ、それも何らかの形で復興につながるような研究がしたいと意気込んでいる。

繰り返すが、玉田は、合格という結果よりも、その過程でみせてくれたヒロスケの言動がうれしかった。

「彼は、人の支えがあつてこそその合格だと何度も口にしていました。そして、いずれは恩を返したい。復興のために力を尽くしたいと語ってくれました。それが何より誇りです。ヒロスケだけではありません。多くの生徒の言動にも同じことを感じました」

玉田の熱い言葉が、彼らに影響を与えたということとはなかったかと水を向けると、玉田は即座に否定した。

「それはおこがましい。私の影響など一切ありません。私が言っていることはある意味で当たり前のこと。家庭や地域など、いろいろな環境のなかで培われてきた、彼女らが本来もっていたやさしさなのでしょう」

後日、そうしたやりとりを告げると、ヒロスケは黎明生の思いを代弁するように、こう答えた。

「そういうことを言う先生なんです！ 自分のことは二の次で、いつだって生徒のことを第一に考えている。確かに、人の役に立つ人間になりたいというのは誰もが感じることだし、自分も小学生のころからそんな仕事につきたいと思っていました。だからこそ玉田先生のストレートな言葉も、素直に耳に入ってきましたし、自分だけではなく、多くの生徒も真剣に耳を傾けていました。ただ、一番大きいのはやはり震災なんです。あれがあつたからこそ、自分は人に支えられているのだということを、はつきりと気づくことができました。あの体験は人生観を変えます。自分が何の役に立つのかということ意識せざるを得ないし、生きる目標が変わります」

大切なのは、伝え続けること

震災後しばらくして、玉田は母親の実家がある牡鹿半島の谷川浜という集落を訪れた。聞いてはいたが、そこには何もなかった。壊滅というより消滅。

その時の心境が、進路指導部発行の『黎明キャリア通信』に、こうつづられている。

「言葉を失う、初めての体験だった。何度も訪れたこと

のある私はもちろん、そこで生まれ育った母や叔母さえ、自分の家の場所を特定できなかった。津波はすべてを、家も、命も、思い出もみんな海にもつていってしまった。思い出とは心の中にあるものだとばかり思っていたが、場所に宿る思い出もあることを知った」

叔父は今も行方不明だ。行く前はわずかに希望をもっていたが、惨状を前にあきらめざるを得なかったという。

玉田は、復興という言葉を軽く考えていたことを反省した。同じ被災県でも、内陸と沿岸部では被害の大きさは天と地ほどに違う。そこにどうしようもないものかしさを感じた。しかし、だからこそ、やるべきことはある。

「沿岸部の先生方が、絶望的な現実の中で生活を立て直そう、子どもたちを何とかしようと必死で頑張っています。だからこそこちらは、具体的な支援はもちろん、次の段階を考えておかなければいけません。物理的な復旧が済んでからずっと続くのがわれわれの仕事です」

大切なのは、伝え続けることだ。

「思うに、戦後もこういう感じだったのでしょう。焼け野原の中で、これから未来を創っていく子どもたちに何を伝え、何を道標にするべきか必死で考えていたと思うのです。それがだんだんと薄れてしまい、結局、繁栄を謳歌してしまった。時とともに失われていくこともあるでしょうが、今回は、何としてもつないでいきたい。自分も伝えると同時に、子どもたちにも次の世代に伝えてほしい。その大切さを訴えていきたいと思います」

進路指導のスタンスは変わらない。軽々しく言えるものではないと前置きをしたうえで、こんな時だからこそ響くものもあるはずだと玉田は言う。

「今回ほど、人生の選択ということの重みがわかったこ

とは言いはずです。だからこそいっそう「人生の選択に真剣に向き合おう、そして選択した人生を真剣に歩んでいこう」と訴えていきたい。ある程度、もの心がついてる年代であれば、この事実を正面から受けとめられるはず。残されたものとして、自分の人生をどう使うか、ことを迫らなければいけません。今だからこそ通じるものがあるはず。あんな目にあつて、あんなに多くの悲劇を見て、それでいて自分には関係ないなんて思える子は一人としていないはずですから（敬称略）

